

論文内容の要旨

申請者 伊富貴初美

退院支援における専門職種間連携の変化のプロセス：

Relational Coordination 理論を基盤としたアクションリサーチ

The Process of Changes of Interprofessional Work in Hospital Discharge Support:

Action Research Based on Relational Coordination Theory

I. 序論

近年、病院完結型の医療から、病気と共存しながら QOL の維持・向上を目指す地域完結型の医療・介護への移行が推進されている（厚生労働省, 2013）。それらに関わる専門職は、患者・家族の様々なニーズを捉え、専門職種が連携して退院支援に取り組む必要がある。

先行文献では専門職種間連携の促進の効果として、医療コストの削減、ケアの質の向上及び構成員のやりがい感が得られることが報告されている。しかし、退院支援における専門職種間連携については、患者・家族の背景や抱える問題が多様であるのに加え、対応する専門家チームの構成員もそれに応じて変わるという特徴があり、このような場での専門職種間連携の促進に関する研究はまだ十分に行われていない。

専門職種間連携の促進に効果的と考えられる理論に Gittell（2000, 2006）の Relational Coordination [RC] 理論がある。この理論は、不確実で、時間制約があり、相互依存のある状況で、関係者間の相互作用の強化を通じて、組織変革を目指すものである。介入の焦点は3つの関係調整（目標共有・役割認識・尊重の態度）と4つのコミュニケーションの次元（頻度・タイミング・正確さ・問題解決的姿勢）にある。この理論は、個人と個人の関係ではなく、職種間の関係を焦点としていることから、患者・家族のニーズに応じて専門職種が連携して取り組む退院支援に役立つと考えた。

II. 研究の目的

患者・家族のニーズに応じた退院支援に向けて RC 理論を基盤としたアクションリサーチを行うことによる専門職種間連携に生じる変化のプロセスと、それによる患者・家族と組織のアウトカムを明らかにすることである。

III. 研究方法

退院支援における専門職種間連携に向けた各専門職種の主体的な取り組みを促進するため、研究のデザインとしてアクションリサーチを用いた。研究実施期間は 2020 年 10 月から 2021 年 3 月までの 6 か月間であった。研究フィールドはある地方の小規模ケアミッ

クス型病院の地域包括ケア病棟であり、研究参加者はこの病棟に入院し、自宅退院が困難であると予測された患者 12 名とその家族 15 名と、この患者・家族の退院支援に関わった看護師 9 名、医療社会福祉士 2 名、理学療法士 3 名、作業療法士 1 名、管理栄養士 1 名の計 16 名であった。このうち、研究の取り組みを推進するコアメンバーとして各職種から計 5 名の協力を得た。

RC 理論に基づきアクション 1、2 とリフレクション 1、2 を計画し、実施した。アクション 1 では RC 理論の勉強会、課題の明確化、アクション 2 の実施に向けた調整を行った。アクション 2 では退院支援のための患者・家族との面談に 2 職種以上が同席して支援を実施し、面談後にその振り返りと参加した専門職同士によるポジティブフィードバックを行った。リフレクション 1 では各事例で行われた退院支援と専門職種間連携を振り返るための専門職へのインタビューを実施した。またコアメンバーによる振り返りとセンスメイキングを実施し、アクションリサーチの実施内容の評価と必要な修正を行った。リフレクション 2 ではこれらの取り組みと成果をまとめた通信を作成し、フィードバックした。

データ収集のため、上の取り組みにおける研究参加者の発言内容を IC レコーダーに録音するか、可能な限り記録シートに記載するよう依頼した。管理者にはインタビューを通じて研究前後の組織の評価を聞き取った。データ分析では各事例における専門職種間の連携、退院支援と患者・家族の反応に着目して、意味を解釈しテーマをつけた。次いで 12 事例のテーマを専門職種間連携の変化の観点から 3 つのフェーズに分けた。最後に以上の結果を RC 理論並びに患者・家族のアウトカムと組織変化の観点から評価した。

本研究は、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会（承認番号 2020-027）及び対象施設倫理委員会の承認（承認番号 596 号）を得て実施した。

IV. 結果

以下、退院支援における専門職種間連携の変化をあらわす 3 つのフェーズと評価を述べる。看護師は NS、医療社会福祉士は MSW、理学療法士は PT、作業療法士は OT と表記した。

A. 退院支援における専門職種間連携の変化を表す 3 つのフェーズ

1. フェーズ 1<定石通りの退院支援に起きる専門職種間の退院目標の食い違いと患者の思いを知ろうとしていなかったことへの気づき> 初期の NS と MSW のみの参加であった 4 事例をフェーズ 1 とした。NS と MSW にはそれぞれ定石と呼べるような患者・家族への関わりがあり、この定石的な関わりは支援に結びつく場面もあったが、結びつかない場面もあった。また面談の場以外での NS・MSW・PT・医師との連携が不十分で、それぞ

れに異なる目標を設定して患者・家族と共有することなく進める場面もあった。退院支援が家族の意向に沿う傾向があり、患者の思いを知ろうとしていなかったとの気づきが得られた。このようななかでも他の専門職種の役割を観察することが自他の役割を認識する機会となった。これらの事例を振り返ることで、退院目標の食い違いや患者の思いを知ることなく家族の意向に沿った退院支援になる傾向などの課題が明確になった。

2. フェーズ2＜退院に向けた面談に同席する専門職種が広がり、患者・家族の語りと一緒に見聞することによる創造性の向上＞ 続いて、従来、面談に同席する機会が少なかったPT・OTの参加が得られ始めた3事例をフェーズ2とした。患者・家族の不安や困りごとと一緒に聞くこと、それぞれの視点から対立する意見であっても出し合うことで、共有される目標がそれぞれの専門職が目指すものではなく、患者・家族のニーズを中心としたものに変化していった。また、今まで気づかなかった専門職種の支援内容やその背景になる考えや思いを知り、自他の専門職種の視点や役割を認識するとともに、相互尊重の態度と信頼感が生まれていった。少しの時間を見つけて声を掛け合ったり、患者のケアが終わるとその様子を伝えるために担当する他の専門職種のもとを訪れたりしてタイムリーな情報共有と意見交換が行われた。その内容は患者への支援にも活かされ、患者の回復意欲が高まり、家族の介護への前向きな態度が引き出されていた。このように面談に同席する専門職種が広がることで、コミュニケーションが密になり、視野の違いから新たな提案が生まれ、創造性のある関わりが見られるようになった。

3. フェーズ3＜専門職種間の相互依存性を高め患者・家族の抱える難題に向き合う対応力の進歩＞ その後の5事例をフェーズ3とした。患者・家族の抱える問題には解決が難しいものが少なくなかったが、住み慣れた自宅で過ごしたいという患者・家族の願いに応じて、専門職種が力を合わせて創造的に解決しようとしていた。不安や困りごとを抱える患者・家族に対しては時間をかけて真摯に話を聞いたり、早期に目標を設定して取り組む必要があればその場で話し合っただけで目標を決めたりするなど、対応にも柔軟性が見られるようになった。また密な連携のもとに他の職種の役割を兼ねて、患者の生活支援、医療・介護、地域支援者との調整を行ったりするなど、個別のニーズに応じたきめ細かで幅広い支援が行われるようになった。これらの専門職種間連携に基づく支援を通じて、患者・家族は不安を軽減し自宅退院に向けて一歩踏み出していた。

B. 評価

1. RC理論に基づく専門職種間連携の評価 研究開始当初はそれぞれの専門職種が独自

に目標を定めていたが、目標が患者・家族のニーズに応じたものへと変化し、その共有がタイムリーに行われるようになった。他の職種が行っている支援やその背景にある考えや思いに気づき、それぞれの専門職種の視点や役割の違いについての理解が深まり、専門職種の間には相互尊重と信頼関係が生じていった。職種間のコミュニケーションを通じて情報共有や意見交換が頻繁に行われ、目標達成に向けて協働が促進された。

2. アウトカム評価 複数の専門職種による多角的な視点から集約された理解しやすい情報が患者・家族に提供され、患者・家族のニーズに合わせた無理のない目標が設定されるようになった。患者・家族が自宅での療養生活や介護への不安について語れるようになり、専門職種が提案する支援を安心材料として、その不安を乗り越え、現状を少しずつ受けとめ、将来の自宅退院に向けた準備に取り組んでいく姿が見られていた。また、組織においても、研究参加者以外の患者・家族の面談に他の職種への参加依頼が増える、進捗状況の確認に終始していたカンファレンスで退院目標が話し合われるようになる、管理者が今後も多職種での面談を継続する意向を示すなどの変化が見られた。

V. 考察

本研究では RC 理論を基盤としたアクションリサーチを通じて、フェーズによる変化として、専門職種間連携の促進とそれに基づく退院支援の創造性と対応力の進歩を確認することができた。アクションとリフレクションにより、患者・家族のニーズへの関心が高まり、それに基づく目標が設定されるようになり、自他の専門職種の役割についての理解が進み、連携を通じての役割発揮に繋がった。特にポジティブフィードバックはコミュニケーションを円滑にし、協働の基盤となる安心感を生み出したと言える。田村（2018）が本来の専門職種間連携では、患者と家族のニーズを知ることから始まり、患者とその家族が思い描く目標に向かって専門職種が一つのチームとなり協働すると述べており、本研究でももたらされた変化と一致する。RC 理論は関係調整とコミュニケーションの相乗効果によって専門職種間連携が促進するもので、本研究でも同様の効果が得られていたと考える。とりわけ研究参加者の課題への気づきと主体的な取り組みが得られたことが、本研究の専門職種間連携の変化および患者・家族と組織のアウトカムに影響したと考える。

VI. 結論

本研究では、一地方の小規模ケアミックス病院の地域包括ケア病棟において、NS、PT、OT、MSW の参加のもとに、RC 理論を基盤としたアクションリサーチを通じて、退院支援における専門職種間連携の変化、患者・家族と組織のアウトカムを明らかにした。